

日本LD学会 第27回大会（新潟）
自主シンポジウム

UDLを促進させる学級集団づくり

齊 藤 勝



ポジティブな学級共同体はUDLを支える。 (Jon Mundorf,2016)

学級経営・学級集団➡学級風土／学級文化／共同体としての集団

- ・学級の子供たち一人一人が主役
- ・その個性を尊重し合うことができる居場所

UDL➡足場的支援（足場作り）
学級集団づくり➡基礎工事

UDLの視点を活かした学習（指導）⇔学級集団

* 学級風土・学級文化・共同体としての集団を含む

学級に影響を与える要因

- ・ 児童生徒同士の間関係の在り方
- ・ 学級の集団としての雰囲気や状態
- ・ 教師の学級経営や指導・援助の在り方



■インクルーシブ教育が求められる背景

「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な配慮を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」

▶通常学級に在籍する児童生徒のうち、「知的発達に遅れはないものの学習面または行動面で著しい困難を示す」児童生徒の割合は6.5%である。（文部科学省, 2012）

▶こうした児童生徒のうち、「学習面または行動面のいずれかの支援が行われている児童生徒」は55.1%で、「いずれの支援も行われていない児童生徒」は38.6%（文部科学省, 2012）

学校教育法施行令の改正（文部科学省, 2013）によって、就学先の決定は、「本人・保護者の意見を最大限尊重」と規定された。

▶就学に際して、先述の理念から、通常学級において障害のある児童生徒が、更に増えることが予想される。

▶通常学級においても、障害の有無に関わらず、すべての子供の学びを保障するものとしてユニバーサルデザインの考えが注目

■ バリアを感じる児童生徒の学級適応状況

50%以上が学級に適応できないという現状

学級に満足感を得ている児童生徒は全体の16%に留まっている。（深沢・河村, 2016）

- ・ 特別な支援を要する児童生徒の学級適応感は低い
- ・ 学級内で認められることが少ない
- ・ いじめやからかいなどを受けやすい



■バリアを感じさせない学級集団づくり

「ユニークな個性をもった子どもたち」の傾向

- ①孤立して，排斥されている
- ②ネガティブなことはされていないが，特別視されている
- ③自然に周りに溶け込んでいる

どんな子も受け入れられる学級集団へ
→さりげなく，確実に展開していく。
その際のキーになるのが・・・



ふだんの指導を少し見直すだけでも、
子どもの学び方に寄り添った授業に変えられる。

そのための指針になるのが、

Universal **D**esign for **L**earning

学びのユニバーサルデザイン

■担任に求められること



「授業づくり」の在り方のみを変革する ×

- UDLの視点を活かしながら**柔軟性のある**「授業づくり」
- **多様性を包含する**「学級集団づくり」

どちらか一方だけを行うのではなく、さりげなく、しかも確実に双方セットで取り組む必要がある。

■バリアを感じさせない学級集団づくり

多様性を包含する学級集団づくりを妨げるのは…

学級担任の「みんな同じ！」をよしとする教育観。

（「こうあらねばならない」という教師の閉鎖的な価値観）

➡真面目な教師ほど多い。

「みんな同じ」をよしとする同調圧力の強い学級風土が形成

➡同一致行動をとれない子どもが受け入れられず、排除されるようになる。

▶「画一的な集団があって、その中にいろいろな児童生徒がいるのだ」という「全体像ありきで部分を見る」という見立てではなく、**「いろいろな児童生徒が集団を構成している」という「部分から全体像を見る」という見立ての転換**が生じている。（佐々木・我妻, 2015）

■バリアを感じさせない学級集団づくり

▶ **多様性を認め合う土台づくり**が必要である。
→多様性の素晴らしさを実践に落とし込む。

▶ 授業を通して **自分にはどういう学びが合っているのか**ということを自己理解していく。
(野口, 2016)

▶ 学級集団の在り方として, 「友達の様々な自力解決」を認め合える雰囲気づくりもとても大切であること, このサイクルを繰り返していくことで, **「わからない」が言える雰囲気, みんなで分かっていこうとする意識, 相手の考えを尊重しようとする風土**が育まれる。
(懸川, 2014)

- UDLを最適に実施するためには, 児童と教師の協働が必要である。
- ポジティブな学級共同体はUDLを支える。(Jon Mundorf, 2016)

■バリアを感じさせない学級集団づくり



複数の多様な学習方法の方法や活動方法を提示し、その後、**「子どもたち個々が、自己選択・自己決定することは当たり前」という風土**をつくる。

➡「みんな同じという同調圧力」が生まれにくくなる。
誰もが**気軽に選択**するので、**「特別感」**がなくなる。

■バリアを感じさせない学級集団づくり

UDL実践者の成長のルーブリック

Katie Novak & Kristan Rodriguez



Based on the CAST UDL Guidelines (2018)

上級になるほど、自らが学習に適したオプションを選択したり、学習の到達度を認知したりすることに加え、**多様な考えを統合しながら学習することが求められている。**

➡協働する学級文化を形成すること

■本日のまとめ

- ・活動・学習目標として，求める姿や行動の在り方を明確に示す。
- ・子どもには，選択する意義・考え方をしっかり理解させた上で選択肢（オプション）から選ばせて行動させる。

➡ただし，単に「自由にやっごらん」は逆効果！

自由度を生かせる個人及び学級（風土／文化）であればこそ，
よりUDLの視点を活かした授業が効果を発揮する。



参考引用文献

- ・阿部利彦（2016）.通常学級でユニバーサルデザインを進める ために, 児童心理2016年1月号別冊, 金子書房, 2-14
- ・CAST(2011).バーンズ亀山静子・金子晴恵（訳） 学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン Ver.2
http://www.udlcenter.org/sites/udlcenter.org/files/UDL_Guidelines_JAN2011_Japanese.pdf
- ・中央教育審議会（2011）.中央教育審議会初等中等教育分科会報告
- ・深沢和彦・河村茂雄（2017）. 小学校通常学級における特別支援対象児在籍数と周囲児の学級適応感の検討. 学級経営心理学研究, 6(1), 1-10
- ・Jon Mundorf (Trans.Shizuko kameyama Barnes) (2016). Universal design for Learning:From Theory to Classroom Practice, Jpn.J.Learn.Disabilit.,25(2),147-154.
- ・権明愛・半澤嘉博・田中謙（2012）. 特別支援教育に関する小中学校の教員の意識に関する研究：ある自治体の教員調査を通して. SNEジャーナル, 18, 80-96.
- ・今枝史雄・楠敬太・金森裕治（2013）. 通常の小・中学校における障害児理解教育の実態に関する研究—実施状況及び教員の意識に関する調査を通して—. 大阪教育大学紀要, 61, 63-76.
- ・片岡 美華（2015）.ユニバーサルデザイン教育と特別支援教育の関係性 についての一考察 鹿児島大学教育学部研究紀要66,21-32.
- ・河村茂雄（2018）.「主体的な学びを促すインクルーシブ型学級集団づくり」図書文化
- ・小貫 悟・桂 聖(2014)。「授業のユニバーサルデザイン入門 どの子ども楽しく『わかる・できる』」授業のつくり方 東洋館出版
- ・内閣府（2016）.障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律
- ・文部科学省（2012）.「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な配慮を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」
- ・文部科学省（2013）.学校教育法施行令の改正
- ・文部科学省（2014）. 障害者の権利に関する条約
- ・齊藤 勝・河村明和（2017）.初等教育におけるICTを活用した授業改善：協働学習を取り入れた体育科の実践から. 学級経営心理学研究, 6(2)174-182.
- ・上野光作・中村勝二（2011）.インクルージョン教育に対する通常学級教員の意識について. 順天堂スポーツ健康 科学研究 3,112-117.

ご清聴ありがとうございました。
masaru.saito@thu.ac.jp

齊 藤 勝

